四

正月八日、昨日とは異なり、江戸は爽やかい晴れ上がった。日が昇ると夜半の名残りの雪も見るみる消えていった。

宮戸川の帰りに、いつものように六間湯に立ち寄った磐音は、金兵衛長屋の戻る。

この日、一日延期された奈緒の吉原乗り込みが、暮れ六つには賑々しく行われる。

丁子屋では乗り込みの延期が一日で済んだことに、

「松の内ではありませぬが、末広がりの八日、おめでたいことでございます」

と喜んでいるとか。

磐音は奈緒の乗り込みが無事終わるまで見届けることを四郎兵衛と約定していた。

そこで七つまでには根岸に戻る手筈になっていた。

四郎兵衛の話では、根岸を出た行列は、寛永寺下から下谷広小路を通り、神田川沿いに浅草橋まで抜けて、えどの札差豪商が見世を連ねる御蔵前通りから山谷堀の今戸橋まで練り歩いて、ここで道中を組み直すとか。

あとは日本堤を吉原の入り口、五十間坂を下って大門を潜る手筈だった。

半刻も寝たか、長屋の戸が開けられた。

「坂崎、おるか」

中居半蔵の声だ。

「なんだ、寝ておるのか」

磐音は慌てて飛び起きた。

「昨夜は徹夜でございましたな」

「仕事か」

慌てて丸めた夜具を部屋の隅に押しやりながら、根岸の一件をざっと話した。

「金にもならぬのに命を懸けての斬り合いか。まあ、奈緒どのの身に関わることゆえ仕方はないがな」

と言いながら中居が部屋に上がってきた。

「今津屋の申しでの件、予測はしていたが藩邸じゅうが大反対だ。なぜ商人如きに藩の内情を知らせねばならぬというわけだ」

宍戸派が倒れたとはいえ、藩内部は昔ながらの頭の固い連中が牛耳っているのか、と磐音は暗澹たる気持ちになった。

「坂崎、それがしは分かっておる。それゆえ、いろいろと説得に努めた」

「どうなされますな」

参勤下番に間近に迫っていた。入費の都合がつかぬでは帰国の仕度さえもできぬのだ。

「明日の夕刻、下屋敷まで来てくれ。新任のご家老福坂利高様がそたなと会いたいと申されておる」

「承知しました」

と答えた磐音は、

「ご家老の人物ですが、いかがですか」

それが、と言った中居は顎を撫でて、

「集まりでもあまり発言はなさらぬ。いや、言葉が多い少ないの問題ではない。どこか鵺のようで摑みどころがないのだ。正睦様がなぜ利高様を江戸家老に推挙なされたか、それがし、理解がつかぬ」

と首を捻った。

「ともかく下屋敷に参ります」

利高との階段で進展があればよいがと思いながら磐音は言った。

丁子屋の寮をでた奈緒の行列の先頭に手古舞姿の禿が立ち、鳶の連中が揃いの法被で木遣りを歌い、紅白の帯で飾られた数丁の駕籠が続いた。駕籠には丁子屋の主の宇右衛門、女将のお勝らが乗っていた。さらに御簾がたらされた輿が続き、その中に一人の白拍子姿の女が乗っていた。

白拍子は平安時代の末に生まれた歌舞で、それを演じたのは遊行女婦、遊女であった。

水干、烏帽子、鞘巻姿の白拍子は、運命を享受するように乗っていた。

輿の周りは吉原・四郎兵衛会所の手代衆らが囲んでいる。

烏帽子の下のうつむき加減の顔は白くお化粧が施され、きりりと刷かれた紅が、御簾越しい見る人の心をなんともくすぐった。

根岸の里を出た行列は、東比叡山寛永寺下を下谷車坂から広小路に出た。

ここでは、大勢の人々が群がって前代未聞の輿を覗いた。が、幕府の威光を損ねぬようにか、ひたすら粛々と進んだ。それでも男たちが、

「見たか、丁子屋の新規の女郎だ。神々しいくらいに美しい女だね」

「なんでも吉原に売られたときによ、すでに千両もの値がついたというぜ」

「そんな法外な話は聞いたこともねえな」

「だがよ、御簾越しに見る女の様子のいいことは、一目千両の女だぜ」

と行く先々で八っつぁん、熊さんが声高に言い合った。

すべて丁子屋の宇右衛門が手を打ち、読売に描かせて吉原乗り込みのことをそれとなく匂わせて、江戸じゅうに知らせていた。

行列は神田川の南を越えて江戸のど真ん中に入ることなく、東へと下り曲がった。

そんな道中を、行く先々で一人の絵師が写しとる姿があった。

絵師北尾重政だ。

浅草橋を右に見て御蔵前通りに入れば、札差たちが牛耳る商人の町だ。

今津屋の老分由蔵とおこんは、橋際から奈緒の乗る輿を見物していた。そのあたりはもう黒山の人だかりである。

二人の前を行く白拍子姿の奈緒はただ一点を見据えて輿に揺られていた。

「おこんさん」

由蔵が呻くように言った。

「これほど哀しくも美しい女見たことがない。私に万両の金子があれば、この場に投げ出して奈緒様を身請けしてやりたいよ」

おこんは何も答えなかった。

奈緒の心中を、磐音の気持ちを思う老分の静かな憤りが、手に取るように理解できた。

運命に弄ばれた二人の男女が、国許から遠く二百六十余里も離れた江戸の地にいた。

女は吉原に売られようとしており、男はその姿をどこからか見つめているはずだ。

おこんのぬねも張り裂けそうであった。

美々しい飾られれば飾られるほど、奈緒の行く末は重く、苦しいものにはならないか。

おこんはただ胸の中で手を合わせ、

（病気をせぬよう、よい運に恵まれますように）

と祈った。

奈緒の行列が去った浅草橋には男たちのため息が漂い残った。